

<報告>

学生による学校訪問を中心とした合唱活動の展望

—昭和と令和の合唱行脚の事例の検討を通して—

**Prospects for Chorus Activities Centered on School Visits by Students
Through Consideration of Case Studies Examples of Chorus Tours
Between Showa and Reiwa****津田 正之 TSUDA Masayuki 山本 幸正 YAMAMOTO Yukimasa**

「合唱行脚」とは、1954（昭和29）年から1989（平成元）年にわたり、国立音楽大学教育音楽学科（1950-1990）に所属していた教員と学生が一丸となり、全国各地の小・中・高等学校等で音楽教室を開催したアウトリーチ活動である。この合唱行脚は、2019（令和元）年に、音楽教育専修を中心とした学生による教育活動として30年ぶりに復活、福島県の小・中・高等学校において、本学の音楽教育専修の学生による合唱活動が展開された。

本研究では、昭和の時代の合唱行脚のねらいや演奏プログラムの特徴など明らかにするとともに、昭和の合唱行脚（1988年6月、千葉大学教育学部附属中学校）と、昨年度に復活した令和の合唱行脚（2019年9月、福島県内の小中高等学校）の事例を取り上げ、それぞれの特徴を明らかにした。さらに、これらの検討を踏まえて、今後の本学の学生による学校訪問を中心とした合唱活動のあり方を展望したものである。

キーワード：合唱，合唱行脚，音楽大学，音楽教師の養成，アウトリーチ

本研究は、令和元（2019）年度個人研究費（特別支給）を得て実施したものである。

国立音楽大学教育音楽学科（1950-1990）では、1954（昭和29）年から1989（平成元）年にわたり、全国各地の小・中・高等学校等を訪問し、合唱を中心とした音楽教室を開催してきた。「合唱行脚」と呼ばれるアウトリーチの活動である。音楽大学生による組織的なアウトリーチ活動の嚆矢といえる活動である。この合唱行脚の功績について、小口浩司（2006）は次の2点を挙げる（p.88）。

- ・合唱活動が教育現場から広く社会へ根付く動機付けをしてきた点
- ・優れた合唱指導の手腕と人格を兼ね備えた教員を教育現場に多数輩出してきた点

1989年に休止した合唱行脚であるが、2019（令和元）年に音楽教育専修を中心としたアウトリーチ活動として30年ぶりに復活。2019年度は、福島県の小学校、中学校、高等学校において、合唱指導やミニコンサートを開催することができた。

本研究では、昭和と令和に実施された「合唱行脚」の概要や実際の活動の特徴を明らかにするとともに、国立音楽大学のアウトリーチ活動の伝統である、学生による学校訪問を中心とした合唱活動のあり方を展望するものである。これまでの研究において、明らかになってきたことは以下のとおりである。

1. 昭和の時代に展開された合唱行脚のねらい，訪問地，プログラムの作成方針などの概要

指導の中心となったのは、岡本敏明（1907-1977）、小山章三（1930-2017）である。昭和30～40年代は岡本敏明、昭和50年代は小山章三がリーダーシップを取っていた。合唱行脚の趣旨は、「音楽教師としての指導力を自ら体験しながら学ぶこと」であった。正規授業のカリキュラムではないが、合唱行脚には優れた指導の手腕を身に付けるといふ、大学の授業にも匹敵する教育実習的な意義付けがなされていた。

1954年から1989年までの35年間で訪問した都道府県は40にのぼる（全国のおよそ9割の都道府県）。合唱行脚の活動が全国的に展開されたことが分かる。昭和の時代のプログラム（ステージ）構成は、ほぼ一貫して、お

おむね次のように構成されていた。[1. 声の紹介（小学校）1. 古典合唱（中・高校）→2. 世界の民謡（日本の民謡なども含む）→3. 美しい女声合唱→4. 愉快的な男声合唱（「どじょっこふなっこ」「私は誰でしょう」など）→5. 音楽劇（「附子」など）→6. 独唱→7. 楽しい合唱→8. フィナーレ]

2. 昭和の合唱行脚の事例とその特徴－千葉大学教育学部附属中学校－

同校で1988（昭和63）年6月18日に実施された鑑賞教室をとりあげ、具体的な活動場面をていねいに取り上げて検討した。その結果、プログラム（ステージ）の構成と実際の活動は、「音楽の授業」という視点から見えてくる必然性、合理性に裏付けられたものであった。さらに、「ユーモア」、「つながり」、「対比」、「聴きあうこと」、「身体表現や演技」、「ストーリー性」などの特徴が読み取れるものであった。

3. 2019年度に実施された合唱行脚の特徴

2019年度の合唱行脚は、同年8月に福島県飯館村立草野・飯樋・白石小学校及び飯館中学校、郡山市第七中学校、福島県立いわき光洋高校で実施された。学生主体でプログラムをつくり、合唱指導やコンサートは、学生主体で進めたことが大きな特徴であった。合唱指導では「対話的な学び」の過程を大切に学習指導が展開されるとともに、ミニコンサートでは、各学年で編成された学生の有志合唱団のレパートリーとなっている曲から、児童生徒に親しみやすい曲が取り上げられていた。

4. 今後の国立音楽大学学生による学校訪問を中心とした合唱活動の展望

昭和の時代は、岡本や小山など合唱の専門性のある教師が、指導にしっかりと関わりリーダーシップをとっていた。音楽大学の学生として質の高い合唱を届けるという点では、専門性のある教師による関わりを検討することも必要である。選曲面では、耳にする機会が少なくとも音楽的に価値のある多様なジャンルから選曲すること、多様な合唱形態、参加型の楽しい合唱活動などを取り入れ、合唱の視野や体験の幅を広げていくことも重要である。その意味では、昭和のプログラム（ステージ）の構成は参考に値するものである。

以上のことは、下記にその一部を発表した。

(1) 実践報告

津田正之・山本幸正（2021.3）「音楽大学による合唱を中心としたアウトリーチ活動－国立音楽大学「合唱行脚」の取組－」音楽学習学会『音楽学習研究』16号。（査読通過：掲載予定）

(2) 学会発表

津田正之・山本幸正（2020.10）「学生による学校訪問を中心とした合唱活動の展望－昭和と令和における合唱行脚の事例検討を通して－」第16回音楽学習学会。

主な参考文献

- ・岡本敏明（1966）『実践的音楽教育論』カワイ出版。
- ・小口浩司（2006）「合唱行脚」『資料Ⅱ-1 合唱行脚活動の歴史』『資料Ⅱ-2 年代別演奏曲目の移り変わり』『国立音楽大学創立80周年事業 音楽教育学科の歩み』pp.88-92, 106-120, 120-131。
- ・小山先生を偲ぶ会実行委員会（2018）『小山先生と私たち』私家版（小山章三（1981）『作直集』私家版を再編集したもの）。
- ・国立音楽大学教育音楽学科（1983）「あんぎゃ 28年のあゆみ」『行脚参加者名簿』（手書印刷資料）。
- ・国立音楽大学教育音楽学科行脚合唱団（1978）「合唱の喜びはここに『楽しい音楽教室』」。